

## 結城紬研究

根橋 正一

立川 和美

池上 隆文

われわれは、茨城県の生活・文化・仕事をテーマにして共同研究を志している。茨城県をフィールドにして社会学を中心とする学際的な研究が現代の日本社会やグローバル社会に有用であると考えられるからである。茨城研究を進めるいくつか理由について述べておこう。

われわれが茨城の産業や人びとの仕事・生活に着目する第1の理由は、近代産業労働から一定程度距離をおく日々を送る人びとの存在である。現代日本の人びとの労働環境は近年さらに厳しさを増し、労働疎外が問題にされた時代以上に、人びとの生活を圧迫し、人びとの豊かな生活・人生に反する現実がある。そんななかで農業や山仕事・海辺の仕事、職人仕事など、自然や自分自身の知恵や力によって生きる人びとの生活や仕事から学ぶべき点は多い。茨城にはそのような魅力的な人びとがたくさんいるのである。

われわれはグローバル社会の研究を進めるなかで、経済発展第一主義の近代化・現代化を追及してきたのであり、そこから発生する新たな諸問題にも直面してきた。例えば、中国の江南地方は過去2千年以上にわたって最も美しく豊かな農業、工業、流通業の発展した地域であったが、ここ10数年の現代化、産業化の波のなかでその姿は激変した。豊かな水を活用していた整備された水路は断ち切れ、水は死に、魚や水鳥たちの姿も消えた。水田は広大な住宅用地や工場用地に造成され、新たに舗装された4車線道路が建設された。巨大都市や工業団地が建設される一方では、利用する企業も開発業者もなくただ無意味に広大な荒地が醜態を晒している地域も少なくない。自然や2千年にわたる先人たちが耕し続けた耕地を破壊することが現代の要求するところであるのだ。翻って、茨城にも最先端のモダンセクターというべき研究学園都市や工業都市が建設されてきたにもかかわらず、耕地や緑地、山林は一定程度確保しながら現代の要求に答えている。中国ばかりでなくアジア諸地域の進むべき道を模索するにも茨城の経験は有意義であるといえる。

茨城に視点をおいた歴史的な研究もまた、茨城研究の興味深いテーマとなる。例えば、

近代西欧世界経済に編入される以前の日本に発生した相互に関連する諸産業の展開に着目すれば、現代の諸問題への対応や反省、見直しの基礎とすることができる。百万の人口を擁する江戸の町を支えた農業・肥料生産・繊維産業・食品産業さらに流通産業などの蚕業体系は、江戸の後背地である関東各地で発展していた。そのなかで、茨城の果たした役割は小さくはないし、現代の人びとの暮らしにも反映している。近代的な工場や企業における疎外された労働とは異なる過去の労働と産業の世界は注目に値するにちがいない。

また、われわれの研究関心の重要な一端は観光社会学にあり、茨城研究は茨城を舞台にした県内外の人びとの交流や観光、リクレーションに資することを目標にしている。

本号には、茨城研究の最初の成果として結城紬に関する3論文を投稿する。結城紬は茨城県を代表する産品であり、長い歴史をもち、何人もの腕の良い職人が連続して手を加えることによって高品質で高価な製品をつくりだすシステムを持って、着尺業界に強力な位置を占める産業でもある。こうしたユニークな結城紬を、われわれの最初の研究の課題とした。根橋論文は結城紬の奢侈性、ブランド性に着目して、その形成過程を明治期中心に整理した。立川論文は、文学に現れた結城紬を分析するユニークな試みである。池上論文は、農業、養蚕の専門家として茨城県の研究所で研究と指導の仕事に長く従事してきた体験を背景として養蚕から紬生産の技術やその歴史について論じた。われわれの研究はまだ基礎的な段階にあり、さらに具体的な問題を設定して続けられることになる。

ここで、本論叢にはじめて投稿することになった池上隆文について簡単に紹介しておこう。昭和25年長野県生まれ、48年東京農工大学農学部卒業後、茨城県蚕業試験場病理部に勤務、養蚕業に関わる研究や指導に当たった。平成4年同病理部長就任。試験場の改組などにより広く農作物や山林に関わる昆虫に関する研究もおこなった。平成10年茨城県農業総合センター園芸研究所蚕糸昆虫研究室室長。この28年間は蚕糸関係の研究に携わり、室長として結城紬用材料である真綿に新蚕品種を使うことを提案し、養蚕家と紬業者との組織づくりにも関わった。平成13年同センター生物工学研究所主席研究員・生物防除研究室長、平成19年4月からは同センター生物工学研究所研究調整監としてセンターの研究を調整する役割を果たしている。